

| | |
|-------------|----------|
| 群 教 セ | G06 - 02 |
| | 平24.246集 |

ボールを力強く投げる力を身に付けるための 小学校体育科指導の工夫

— 体づくり運動に投動作の局面指導「習得する時間」を取り入れて —

長期研修員 小林 昌行

《研究の概要》

本研究は、「ボールを力強く投げることができる児童の育成」を目指したものである。これまでの体育科授業の改善を図る「習得－活用型」学習過程を編成し、体づくり運動において、ボールを力強く投げる力の習得を目指した局面指導「習得する時間」を取り入れた。局面指導では、動きの違いの気付きから自己課題を見付けた後、動きの感覚を言語化（オノマトペ化）して児童に伝える活動や投動作のリズムやフォームを確かめる運動を行った。

キーワード 【体育－小 中学年 体づくり運動 投げる力 オノマトペ】

I 主題設定の理由

平成20～22年度の「全国体力・運動能力・運動習慣等調査」の結果を分析すると、全国の児童の体力は低水準を示している傾向にあると言える。また、群馬県の児童の体力も全国と同様に依然低水準を示している傾向にある。

児童の体力の低下の要因には、学校の体育の授業時間数の減少や授業の質の変化、学校行事の縮小化などの学校体育に関わるもののほかに、外遊びの減少、運動やスポーツをする時間、空間（場所）、仲間のいわゆる三間（サンマ）の減少、食事や睡眠などの生活習慣の悪化なども考えられる。特に、児童の基礎的な運動能力の一つである投能力（投げる力）の低下は、投の要素を含むゲーム・ボール運動の領域で、その運動の特性を十分に味わえないことにつながるが多い。一般的には、投能力は意図的に学習しないと身に付けることが困難であると考えられているが、最近の児童の遊びやスポーツは多様化しており、投能力を使った遊びや運動・スポーツを経験しないで成長する児童が増えていることが投能力低下の一つの要因と推測されている。

群馬県でもこれまでの諸調査の分析により、群馬の児童に身に付けて欲しい資質や能力が明らかになり、平成24年3月に「はばたく群馬の指導プラン」としてまとめられた。体育科・保健体育科の課題としては、「運動の行い方が分かり、運動ができるようにする」ための授業改善を図ることが挙げられるとともに、群馬の児童の伸ばしたい資質や能力の一つとして、「投力を高めること」が挙げられた。

そこで、現代の児童の投能力の形成と発達にとって、学校体育の果たすべき役割は重要であると考えた。つまり、投能力を高めるための授業づくりを行い、授業において児童の投運動の経験不足を補うなどの基礎的な投能力の習得に結び付けることができる学習過程を編成し、授業実践を行う必要があると考えた。

本研究では、基礎的な投能力を身に付けるために、体づくり運動に投動作の習得ができる学習を意図的に取り入れることで、児童の投能力を高めるための有効な指導方法や手だてなどを実践を通して明らかにすることが大切であると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

体づくり運動（多様な動きをつくる運動）の学習において、投動作の局面指導「習得する時間」を取り入れ、投動作の動きの違いの気付きから自己課題を見付けた後、動きの感覚を言語化（オノマトペ化）して、工夫した場で課題を追究すれば、ボールを力強く投げる力を身に付けることができることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

- 1 単元の導入において、示範の動きと自分や友達の動きを写真や動画で比較すれば、動きの違いに気付くことができるから、投動作の基礎を身に付けるための課題を見付けることができるであろう。
- 2 単元の展開において、投動作を言語化（オノマトペ^{*1}化）すれば、投動作の技能ポイントを容易に理解できるようになるから、投動作の基礎的な動きの感覚を身に付けることができるであろう。
- 3 単元の終末において、投動作のリズムやフォームを互いに確かめながら運動に取り組める場を設ければ、投動作の技能が高められるから、ボールを力強く投げる力を身に付けることができるであろう。

Ⅳ 研究の内容

1 ボールを力強く投げる力とは

本研究では、「ボールを力強く投げる力」を“ボールを強く・速く・遠くへ投げる力”にとらえた。つまり、児童一人一人が野球の投手がボールを投げる時のような一連の投動作を身に付け、ボールを強く投げたり、速く投げたり、そして、遠くへ投げられる力をはぐくむことが何より大切であると考えたからである。

宮丸^{*2}氏らの研究によると、ボールを投げる投動作は6パターンに分類できるとしている（図1）。本研究でも、児童の投運動の実態把握や投動作の分析、段階的な指導を行うために、まず、この投動作の分類を児童の投運動を観察する着眼点として考えることにした。

また、「はばたく群馬の指導プラン」では、小学校中学年（3・4年生）の目標を「“投げる手と反対の足を一步前に踏み出して遠くへ投げるができる”」（図2）としていることから、小学校中学年までに投運動の基礎となる一連の投動作を身に付けることが最も重要であると考え、研究対象を小学校中学年児童とすることにした。

最近の体育科学の研究では、運動やスポーツを行う際の“動きの感覚”をはぐくむことを重要視している。そこで、本研究でも、投運動の基礎となる投動作を高めるための手だてとして、小学校中学年の児童のもつ“動きの感覚”を調査しながら、投動作の指導の充実を図る活動を考え、力強く投げる力を身に付けるための授業を構想した。

| パターン | 投動作 |
|------|--|
| 6 | 野球のピッチングのワインドアップモーションが加わる |
| 5 | 投げ手と反対側の足の投方向へのステップがあり、体重移動をしながら体幹部を捻転させて投げる |
| 4 | さらに、投げ手側の足の投方向へのステップが加わり、体重を移動して投げる |
| 3 | パターン2の段階に、肘と肩を後方に引く動作と体幹部の回転を加えて投げる |
| 2 | パターン1の投げ方で、手が肩の後方へ引き上げられるようになる |
| 1 | 上体の前後方向の動きと手と肘の伸展だけで、ボールを投げる |

(宮丸氏らによる投動作の分類)

図1 投動作の分類（6パターン）

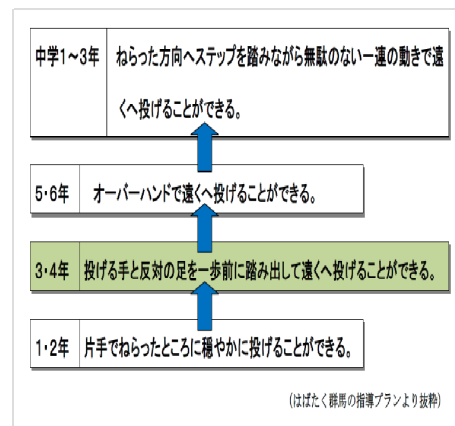


図2 各学年の伸ばしたい資質・能力

*1 オノマトペ：動作の内容を擬音語、擬態語で表した言葉

*2 宮丸：宮丸 凱史（Miyamaru, Masashi） 前筑波大学名誉教授（体育科学）

2 体づくり運動に投動作の局面指導「習得する時間」を取り入れるとは

本研究は、小学校中学年の児童を対象とし、「ボールを力強く投げることができる児童の育成」がねらいである。児童が投の要素を含むゲーム・ボール運動領域で、その運動の特性を十分に味わえるようにするためには、体づくり運動領域でしっかりと投運動の基礎を身に付ける指導を行う必要があると考え、体づくり運動（多様な動きをつくる運動）の単元において、投運動の基礎となる投動作の習得を促す学習、つまり、投動作の局面指導を意図的に組み入れることを構想した（図3）。

この投動作の局面指導は、児童のもつ投の動きの感覚を大切にしながら指導を意図的・計画的に行うことで、力強く投げられる力の習得を期待するものであり、本研究では、投運動の基礎となる投動作を重点的に学習する時間「習得する時間」とすることとした。

また、「はばたく群馬の指導プラン」では、これまでの授業の改善を図る有効な手だてとして、「習得－活用型」の学習過程が例示された。そこで、本研究でも投の要素を含むゲーム・ボール運動領域の学習の時間を身に付けた投運動を「活用する時間」として構想することで、「習得－活用型」の学習過程を編成したいと考えた。つまり、投動作の局面指導にあたる「習得する時間」では、投運動の行い方や技能ポイントがきちんと分かり、基礎・基本を押さえた投運動が確実にできる児童の育成をねらいとしている。

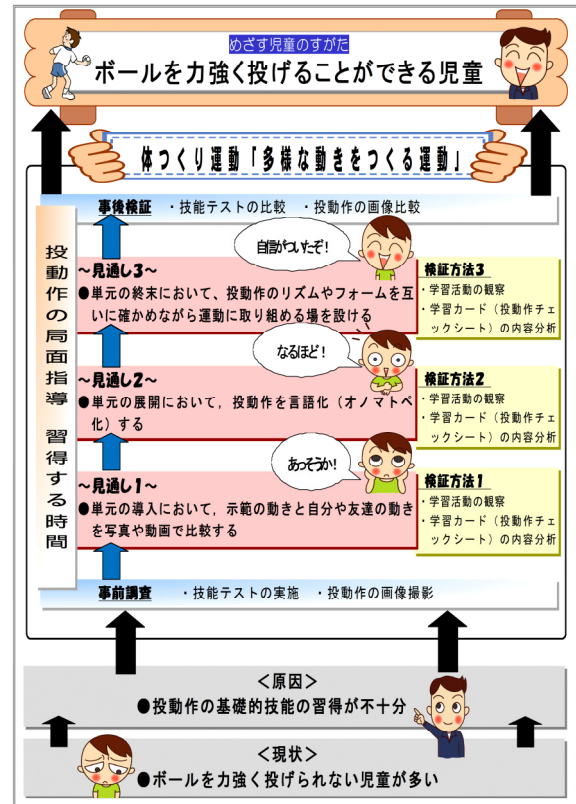


図3 研究構想図

3 局面指導「習得する時間」での手だて

(1) 示範の動きと自分や友達の動きを写真や動画で比較する活動について

単元の導入時においては、デジタル機器の活用による視覚的に動きをとらえる支援を考えた。この活動は、示範の動きと自分や友達の動きを写真や動画で比較することで、現在の自己の投運動の把握やより良い動きへの気付きを促し、投動作の基礎を身に付けるための課題を見付けることがねらいである。

まず、学習前の各児童の投動作をデジタルカメラで撮影し、各児童の投動作が分かる連続写真を学習カード（図4）に貼り付けて配付する。そして、学習カードを活用して、教師による示範の動きと自分の動きを比べる学び合い活動（話し合い）を行い、動きの違いや投球フォームの違いに気付かせる。さらに、模範となる高学年児童の投球の様子を動画で撮影しておき、その動画を視聴しながら投動作を比較する学び合い活動を行うことで、投動作の基礎を身に付けるための課題を見付けることができるであろうと考えた。

図4 学習カード（投動作チェックシート）

(2) 投動作を言語化(オノマトペ化)する活動について

単元の展開時においては、言語による動きをとらえる支援を考えた。この活動は、投動作の基礎的な動きの感覚を身に付けることがねらいである。まず、児童のもつ投げる動きの感覚を「投げる動きの感覚調査用紙」(図5)を用いて調査し、児童がもつ共通の動きの感覚を探る。そして、学び合い活動の中で、その感覚をオノマトペ言語で「力強く投げるためのポイント」として児童に伝える活動を行うことで、児童一人一人が力強く投げるための基礎的な動きの感覚を容易に理解できるようになるだろうと考えた。また、動きの感覚を確かめられる三つの場(強く投げる運動をする場・速く投げる運動をする場・遠くへ投げる運動する場)を設定して投運動に取り込むことで、投動作の基礎的な動きの感覚が身に付くであろうと考えた。

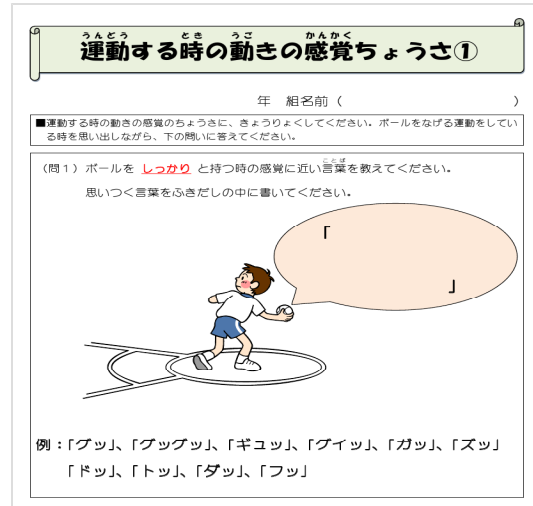


図5 投げる動きの感覚調査用紙

(3) 投動作のリズムやフォームを互いに確かめながら運動に取り組める場について

単元の終末時においては、投動作のリズムやフォームを互いに確かめながら運動に取り組める場を設定することを考えた。この活動は、各児童の投動作の技能の習熟を図り、ボールを力強く投げる力を身に付けることがねらいである。まず、前時の三つの場を活用し、投動作のリズムやフォームを児童相互で見合ったり教え合ったりしながら、ボールを投げる運動が楽しめる活動を考えて。つまり、児童相互で投運動が繰り返し行えるよう工夫することで、運動を楽しみながら投動作の技能が高められ、児童一人一人にボールを力強く投げる力を身に付けることができるであろうと考えた。

V 研究の計画と方法

1 授業実践の概要

| | |
|------|---|
| 対象 | 研究協力校 小学校 第3・4学年 全15名 |
| 実施期間 | 平成24年9月14日～10月12日 全5時間(投動作の局面指導 3時間) |
| 運動領域 | 体づくり運動(多様な動きをつくる運動) - (ウ)用具を操作する運動- |
| 単元名 | 「ボール投げの名人になろう!」 |
| 単元目標 | ボールを力強く投げるための基礎を身に付け、ボールを強く・速く・遠くへ投げるができるようにする。 |

2 検証計画

| 検証項目 | 検証の観点 | 主な検証方法 |
|--------------|---|-------------------------------------|
| 見通し1 (導入) | 単元の導入において、示範の動きと自分や友達の動きを写真や動画で比較することは、投動作の基礎を身に付けるための課題を見付けることに有効であったか。 | ・学習活動の観察 ・学習カード(投動作チェックシート)の内容分析 |
| 見通し2 (展開) | 単元の展開において、投動作を言語化(オノマトペ化)することは、投動作の基礎的な動きの感覚を身に付けることに有効であったか。 | ・学習活動の観察 ・学習カード(投動作チェックシート)の内容分析 |
| 見通し3 (終末) | 単元の終末において、投動作のリズムやフォームを互いに確かめながら運動に取り組める場を設けたことは、ボールを力強く投げる力を身に付けることに有効であったか。 | ・学習活動の観察 ・学習カード(投動作チェックシート)の内容分析 |

3 抽出児童

※抽出児童A～Cは、宮丸氏らによる投動作の分類パターンに対応する

| | | |
|-----|-------|--|
| 児童A | パターン5 | 投げ手と反対側の足の投方向へのステップがあり、体重移動をしながら、体幹部を捻転させて、ボールを投げる児童 |
| 児童B | パターン3 | 肘と肩を後方に引く動作と体幹部の回転を加えて、ボールを投げる児童 |
| 児童C | パターン1 | 上体の前後方向の動きと手と肘の伸展だけで、ボールを投げる児童 |

4 指導計画（全5時間）

※太線内を投動作の局面指導「習得する時間」とする

| 過程 | 時 | 主な学習活動 | 研究上の手だて |
|--|--------------------------|---|---|
| 事前 | 1 | <ul style="list-style-type: none"> ■本時の学習課題の確認 ■学び合い活動（活動1） ①測定方法を知る ②練習をする ■やってみる活動（活動2） ①ソフトボール投げの記録測定をする ■まとめ | <ul style="list-style-type: none"> ・学習のはじめとして、新体力テストのソフトボール投げの記録測定を行う。 ・記録測定を行うと同時に児童一人一人の投動作の様子をデジタルカメラで撮影し、今後の学習に生かせるようにする。 |
| 投動作の 見 通 し 1 | 2 | <ul style="list-style-type: none"> ■本時の学習課題の確認 ■学び合い活動（活動1） ①投動作を写真で比較する ②投動作を動画で比較する ■やってみる活動（活動2） ①かべぶつけ運動をする ②的当て運動をする ■まとめ | <ul style="list-style-type: none"> ・学習前の児童の投動作の写真を貼り付けた学習カード（投動作チェックシート）を配付し、教師による示範の動きと自分や友達の動きを比較する学び合い活動を行う。 ・高学年児童の投動作の様子をビデオで視聴し、上手な点について話し合うとともに、手足の動きとステップの有無などに着目して投動作を比較する学び合い活動を行う。 ・投動作の基本的な技能の習得を目的としたボール投げ運動（やってみる活動）を行う。 |
| | 局面指導 見 通 し 2 | <ul style="list-style-type: none"> ■本時の学習課題の確認 ■学び合い活動（活動1） ①投動作を言語化（オノマトペ化）する ■やってみる活動（活動2） ①強く投げる運動をする—バウンド投げ ②速く投げる運動をする—スローイン投げ ③遠くへ投げる運動をする—フライング投げ ■まとめ | <ul style="list-style-type: none"> ・ボールを投げる一連の動きが分かる資料を掲示し、共通の動きの感覚を確かめながら学び合い活動を行う。 ・話し合いが深まったところで、学習カード（投動作チェックシート）にオノマトペカードを貼り付けて、投動作を言語化（オノマトペ化）し、「力強く投げるためのポイント」として児童に伝える活動を行う。 ・強く・速く・遠くへを意識したボール投げ運動（やってみる運動）を行う。 |
| 習得 す る 時 間 見 通 し 3 | 4 | <ul style="list-style-type: none"> ■本時の学習課題の確認 ■楽しむ活動（活動2） ①リズムを互いに確かめながら運動をする ②フォームを互いに確かめながら運動をする ■まとめ | <ul style="list-style-type: none"> ・児童相互でリズムを教え合いながら、複数の楽しむ活動が行える場（前時と同様の三つの場：強く投げる運動をする場、速く投げる運動をする場、遠くへ投げる運動をする場）を設定し、力強く投げる活動を繰り返し行う。 ・児童相互でフォームを教え合いながら、複数の楽しむ活動が行える場（前時と同様の三つの場）を設定し、力強く投げる活動を繰り返し行う。 |
| 事後 | 5 | <ul style="list-style-type: none"> ■本時の学習課題の確認 ■学び合い活動（活動1） ①測定方法を知る ②練習をする ■やってみる活動（活動2） ①ソフトボール投げの記録測定をする ■まとめ | <ul style="list-style-type: none"> ・学習のまとめとして、新体力テストのソフトボール投げの記録測定を行う。 ・記録測定を行うと同時に、児童一人一人の投動作の様子をデジタルカメラで撮影する活動を行い、学習前と学習後の変容を把握できるようにし、今後の学習に生かしていく。 |

VI 研究の結果と考察

1 単元の導入において、示範の動きと自分や友達の動きを写真や動画で比較することは、投動作の基礎を身に付けるための課題を見付けることに有効であったか。

(1) 具体的な実践内容

単元の導入時（第2時）においては、前時の事前学習（ソフトボール投げの技能テスト）の際に撮影した児童の投動作の写真を、画像編集ソフトを使用して連続した動きが分かる写真に加工し、学習カードに貼り付けて配付した（図6）。そして、教師による示範の動きと自分や友達の動きを写真で比べる学び合い活動とともに動きの違いや投球フォームの違いに気付かせる学び合い活動を行った。また、高学年児童の投球の様子をビデオ動画で視聴して上手な点について話し合いながら、手足の動きとステップの有無などに着目して投動作を比べ、動きの違いに気付かせながら、自己の投動作の課題を考えさせた。

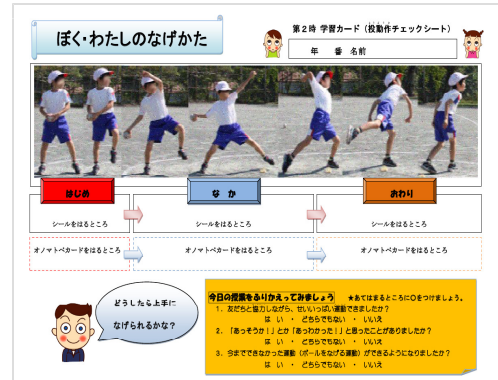


図6 学習カード(第2時)

(2) 結果・考察

教師による示範の動きと自分や友達の動きを写真で比較する学び合い（図7）では、児童一人一人の投動作の写真を活用したが、児童にとっては、自己の投動作を写真で見ること自体が初めての体験であり、写真を見て驚きの声があがった。

また、教師による示範の動きと自分や友達の動きを視覚的に比較する活動は、たいへん活発な学び合いを生み、手足の動きの違いやフォームの違いを見付けて、多様な意見を発言する児童が多かった。

この活動は、児童の投動作の写真を加工するなどの多少の手間はかかったものの、写真や動画による視覚的な比較は、これから投の運動を学習しようとする児童一人一人の興味・関心・意欲を十分に高めるものになっていたと考えられる。

また、模範となる高学年児童の投球の様子をビデオ動画で視聴する学び合い（図8）では、手足の動きや投球フォームの違い、そして、ステップの有無などについての多様な意見を児童から聞くことができた。この活動は、小学校中学年児童にとっては憧れの先輩である高学年児童の投球の様子をビデオ動画で視聴することになり、目指すべき自己の姿をはっきりと確かめられるものになったと考えられる。

抽出児童Aは、投げ手と反対側の足を一步前に踏み出して投げるフォームに関心を示し、「ステップを大きくする」という目標を自ら設定し、やってみる活動では、一步前に大きく踏み出す動作を繰り返し行うことができた。

抽出児童Bは、自己の投げるフォームに関心を示したが、動きの違いになかなか気付かない様子だったので、手と足の動きに着目するよう声かけを行ったところ、自己の投動作の写真で気を付けたいところに丸印を付けて、自分なりに見通しをもつことができた。やってみる活動①（図9）では、手や肘の位置に気を付けながら、一步前に踏み出して投げるという動作を繰り返し行った。

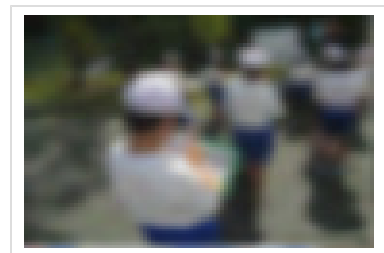


図7 写真で比較する様子

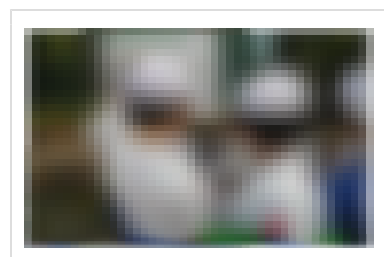


図8 動画で比較する様子



図9 やってみる活動①

抽出児童Cは、自己の投げるフォームに関心を示したが、どうしたら上手にできるのか分からずにいる様子だったので、再度、示範の動きと自分の動きを比べながら、手と足の動きに着目するよう声かけを行い支援したところ、自己の投動作の写真で気を付けたいところに丸印を付けて、自分なりに見直しをもつことができた。また、やってみる活動②（図10）では、校庭に引いた白線のラインを意識しながら、一歩前に踏み出して投げるという動作を繰り返し行った。

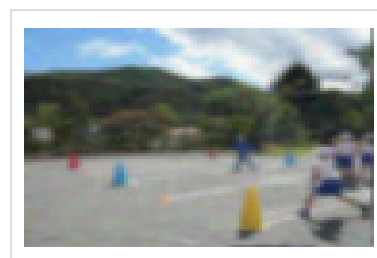


図10 やってみる活動②

単元の導入時（第2時）の学習の振り返りの場面における学習カードの自己評価の結果（図11）を見ると、『「あっそうか!」とか「あっわかった!」と思ったことがありますか?』という設問には、「はい」と答えた児童は9名で、「どちらでもない」と答えた児童は4名、「いいえ」と答えた児童は2名であったことから、示範の動きと自分や友達の動きを写真や動画で比較する活動は、児童の主体的な活動を生み出すために必要な「授業時における“新しい発見”」を生む手だてとなったと考えられる。

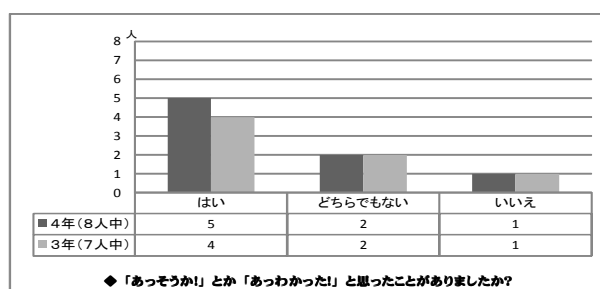


図11 学習の振り返り場面での自己評価結果

また、投動作の基礎となる“動き”に着目して写真や動画で視覚的に比較することで、大まかではあるが自己の課題を見付けやすくなっていたことは、今まで自己の投動作に関心が無かった児童の投運動への関心を高め、これから投運動を学習しようとする児童の意欲を喚起する機能が有効に働いたからだと考えられる。

以上のことから、示範の動きと自分や友達の動きを写真や動画で比較することは、投動作の基礎を身に付けるための課題を見付けることに有効であったと考える。

2 単元の展開において、投動作を言語化（オノマトペ化）することは、投動作の基礎的な動きの感覚を身に付けることに有効であったか。

(1) 具体的な実践内容

単元の展開時（第3時）においては、事前調査（投げる動きの感覚調査）で明らかになった「児童が投運動をする時の共通の動きの感覚（しっかり・すばやく）やリズムをオノマトペ言語を用いて確かめながら学び合い活動を行い、投動作を言語化（オノマトペ化）して、児童に「力強く投げるためのポイント」として伝える活動を行った。具体的には、校庭の一角での学び合いの場を設け、ボールを投げる一連の動きが分かる資料（図12）を掲示して、ボールを投げる時に気を付けていることなどを話し合いながら、児童のもつ共通の動きの感覚やリズムを見付け出す支援を行い、投動作の基礎的な動きの感覚を考えさせた。



図12 第3時の資料掲示の様子

(2) 結果・考察

事前調査の結果（図13～15）を見ると、児童の中には設問の意味を理解できずに無回答になってしまった児童も多かったが、「しっかり」の感覚に近いオノマトペ言語は「ギュッ」「グイッ」、すばやくの感覚に近いオノマトペ言語は「ビュン」「シュッ」、リズムの感覚に近いオノマトペ言語は「ワン・ツー・スリー」と答えた児童が多いことが分かった。

この児童のもつ感覚を言語化（オノマトペ化）する学び合いでは、児童のもつ感覚になるべく近いオノマトペ言語を使用した。児童にとってオノマトペ言語は身近な言葉であり、オノマトペ言語を用いて動きの感覚を伝える活動を進めてみると、一瞬にして教師の意図する投動作の大切な動きの感覚をつかむことができ、多様な意見を発言する児童が多かった。

この活動は、事前調査などの準備が必要であるものの、投動作の基礎的な動きの感覚をより現実的に把握することに役立つものになっていたと考えられる。

抽出児童Aは、オノマトペ言語からボールをしっかり持つ感覚やボールを手から押し出す感覚、腕をすばやく振る感覚、投げる時のリズムの感覚を自ら考えて意欲的に発言して学び合いを深め、やってみる活動では、投げる時の合い言葉として声に出しながら投運動を繰り返し行った。

抽出児童Bは、今まで何気なく行っていた投動作をオノマトペ言語で確かめながら学び合いに参加し、やってみる活動では、投げる動作がぎこちない様子だったが、オノマトペを声に出して投げるようアドバイスをを行ったところ、思い切りの良い投げる動作を何回も繰り返し行った。

抽出児童Cは、オノマトペ言語を頼りに、大切な感覚を力強くなげるためのポイントとして理解して学び合いに参加し、やってみる活動では、自分なりに「強く・速く・速くへ」ということを意識して精一杯投運動を繰り返し行い、学習の振り返りの場面では「前より少しできるようになった」と感想を発表した。

単元の展開時（第3時）の学習の振り返りの場面における学習カードの自己評価の結果（図16）を見ると、『ボールを投げるポイントを考えながら運動することができましたか？』という設問には、「はい」と答えた児童は14名で「どちらでもない」と答えた児童は1名、「いいえ」と答えた児童は0名であったことから、投動作を言語化（オノマトペ化）する活動を取り入れたことで、多くの児童が力強く投げるためのポイントを容易に理解して運動できたと考えられる。

また、やってみる活動では、オノマトペを声に出したり、合い言葉にして運動する児童も現れたり、投げる動作がぎこちない児童もオノマトペを手がかりにして運動に取り組む姿が多く見られたことは、オノマトペによるポイント指導の機能が有効に働いたからだと考えられる。

以上のことから、投動作を言語化（オノマトペ化）することは、投動作の基礎的な動きの感覚を身に付けることに有効であったと考える。

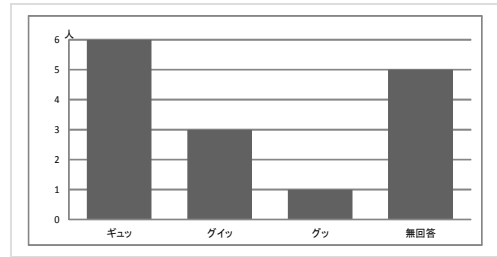


図13 動きの感覚調査結果（しっかり）

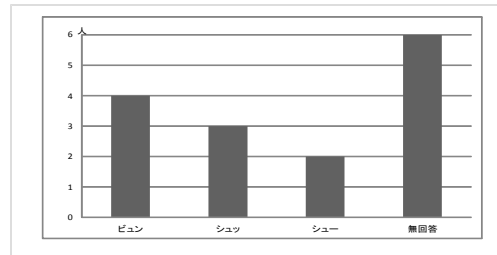


図14 動きの感覚調査結果（すばやく）

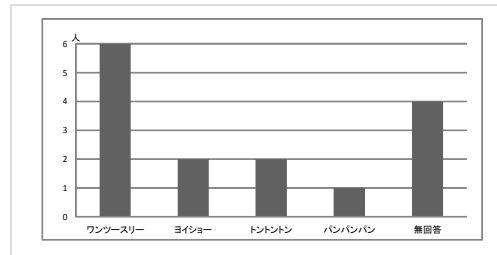


図15 動きの感覚調査結果（リズム）

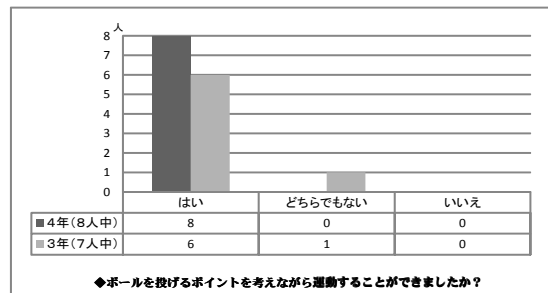


図16 学習の振り返り場面での自己評価結果

今日の授業を振り返って勉強しよう。*あやまるとはOKのマークをしよう。

1. 友だちと協力しながら、楽しい運動ができましたか？
はい、どちらでもない、いいえ
2. ボールを投げるポイントを考えながら運動することができましたか？
はい、どちらでもない、いいえ
3. 今まででなかった運動（ボールを投げる運動）ができるようにになりましたか？
はい、どちらでもない、いいえ

図17 学習カード(第3時)

3 単元の終末において、投動作のリズムやフォームを互いに確かめながら運動に取り組める場を設けたことは、ボールを力強く投げる力を身に付けることに有効であったか。

(1) 具体的な実践内容

単元の終末時（第4時）は、前時で学習した「力強く投げるためのポイント」や投動作のリズムやフォームを児童相互（二～三人一組）で見合ったり教え合ったりしながら、ボールを投げる運動を楽しむ活動を設定して、投運動を繰り返し行った。具体的には、前時で習得した投動作の基礎的な動きの感覚を活用しながら、児童相互で力強く投げる運動を繰り返し行えるように、活動の場は前時と同様の三つの場（強く投げる運動をする場：「バウンド投げの場」（図18）、速く投げる運動をする場：「スローイン投げの場」（図19）、遠くへ投げる運動：「フライング投げの場」（図20））とし、児童は4年生と3年生との二人組のペアや三人組のグループをつくり運動に取り組んだ。

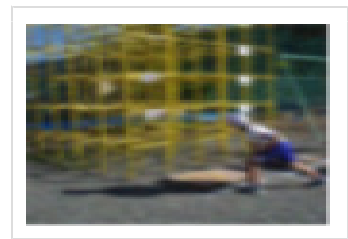


図18 バウンド投げの場



図19 スローイン投げの場



図20 フライング投げの場

(2) 結果・考察

児童は前時で学習した「力強く投げるためのポイント」についてはよく覚えていたものの、投動作のリズムやフォームを意識して運動している児童は少なかった。そこで、活動に入る前に、「リズムを確かめるポイント」と「フォームを確かめるポイント」を確認してから楽しむ活動に取り組むこととした。多くの児童は、三つの場での投運動の取り組み方などについてはよく覚えていたため、スムーズに活動に入ることができた。児童にとって楽しむ活動の時間は、前時と同様の三つの場が前時にできなかった投運動に再度挑戦できる場となり、児童なりの様々な工夫を試すことができる時間になっていた。また、学習カード（図21）を活用して、リズムやフォームがきちんとできているかを友達にチェックしてもらう活動では、一投一投を大事にして力を込めて投げる児童が数多く見られた。この活動は、児童相互での活動であったため、ペアやグループづくりの面で注意が必要であったが、投能力の向上を図るために必要な運動量を十分に確保していたため、ボールを力強く投げる力を身に付けることに役立つものになっていた。

抽出児童Aは、リズムのオノマトペを何度も声に出して、繰り返し力強い投動作を行った。また、腕の振りを「ビュン」とすることを意識したり、一緒に組んでいた3年生には、投動作を見て「ワン・ツー・スリーのリズムで投げるんだよ」「こうするといいよ」とアドバイスしたりしながら意欲的に活動した。

抽出児童Bは、一緒に組んでいた4年生に「投げるから見ていてね」と声をかけたり、4年生にアドバイスをもらいながら投動作を繰り返し行った。また、リズムやオノマトペを声に出して投げている友達の様子を見て、「同じようにやってみよう」と繰り返し挑戦した。

抽出児童Cは、一緒に組んでいた4年生のアドバイスを受けながら意欲的に活動した。「ヨイショー」と投げるリズムを声に出しながら、力強く投げようと運動していたが、バウンド投げではボールが真上に飛ばないこともあり個別で支援した。

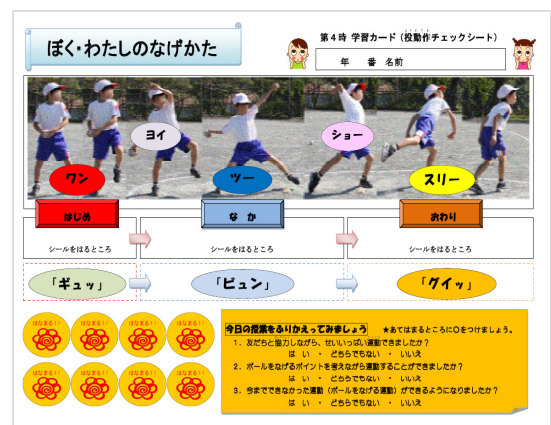


図21 学習カード(第4時)

単元の終末時（第4時）の学習の振り返りの場面における学習カードの自己評価の結果（図22）を見ると、『今までできなかった運動ができるようになりましたか?』という設問には、「はい」と答えた児童は12名（4年生8名、3年生4名）、「どちらでもない」と答えた児童は3名（3年生3名）、「いいえ」と答えた児童は0名であったことから、今までできなかった運動（投運動）ができるようになったと自覚している児童が多いことが伺える。また、単元全体を通しての変容（図23）を見ると、授業が進むにつれて今までできなかった運動ができるようになったと自覚している児童が増えていることが分かるとともに、単元の終末時において、「はい」と答えた児童が大幅に増えたことは、投動作の大切な動きを身に付ける練習が児童相互で繰り返し行われ、投動作の向上が図られたためであると考えられる。つまり、簡易な三つの場

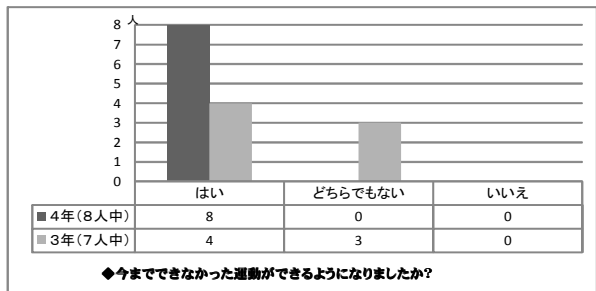


図22 学習の振り返り場面での自己評価結果

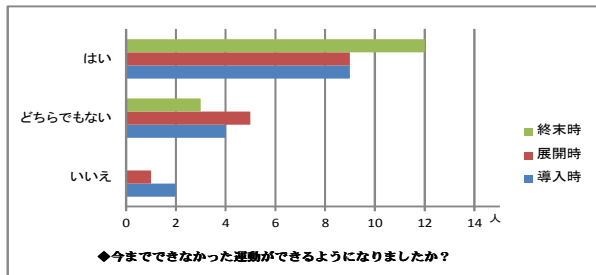


図23 単元全体を通しての変容

の児童相互によるリズムやフォームに着目しながら運動を楽しむ活動が、自己課題の追究活動を十分に行うことができる時間となり、児童一人一人の投能力の向上を助ける機会になったと考えられる。そして、個人差はあるものの投運動ができるようになったという有能感を高めている児童が多いことは、児童相互によるリズムやフォームを教え合う主体的な学習活動の中で、自己の投運動の技能の向上が自覚できる機能が有効に働いたからだと考えられる。

以上のことから、単元の終末において、投動作のリズムやフォームを互いに確かめながら運動に取り組める場を設けたことは、ボールを力強く投げる力を身に付けることに有効であったと考える。

VII 研究のまとめ

1 成果

- 学習後のソフトボール投げのクラス平均記録を学習前の記録より2m向上させることができた。また、児童一人一人の投げる様子に「投げる手と反対の足を一步前に踏み出して遠くへ投げる」などの“力強さ”（図24）を見ることができるようになった。
- オノマトペ言語を取り入れた指導を行うことが、投げる動きの感覚をつかむ指導の充実に結び付くことが分かった。



図24 学習後の児童の投動作

2 課題

- 投動作の習得に時間がかかる児童も見られた。児童一人一人の確実な投能力の向上を目指すには、投動作の習熟を図る時間をより一層充実させる必要がある。
- 総合的な投能力を身に付けるためには、継続的な指導や支援が欠かせないため、活用する時間（ゲーム・ボール運動領域）での系統立った指導が必要である。

<参考文献>

- ・金子 朋友 監修 吉田 茂・三木 四郎 編 『教師のための運動学』 大修館書店(2009)
- ・藤野 良孝 著 『スポーツオノマトペ なぜ一流選手は「声」を出すのか』 小学館(2008)